

令和5年度 第1回特別史跡埼玉古墳群保存整備協議会 会議録（抄録）

1 開催日時 令和5年7月18日（火）10：30～15：00

2 場 所 埼玉県立さきたま史跡の博物館講堂

3 委員出席者

石島 きく江	行田市文化財保護審議委員
井上 尚明	国土館大学・立正大学講師
佐藤 信	東京大学名誉教授
高久 健二	専修大学教授
森田 好一	元秩父県土整備事務所長

4 事務局出席者

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課	副課長	森内 優子
	史跡・埋蔵文化財担当 主査	倉澤 麻由子
さきたま史跡の博物館	館長	栗岡 真理子
	副館長	小林 裕一
	主席学芸主幹	佐藤 康二
史跡整備担当	学芸員	宮原 正樹
	学芸員	吉田 修太郎
	学芸員	宇高 美友子
営繕・公園事務所公園担当	担当部長	岡野 勇
	担当課長	奥隅 健

5 進行の概要

- (1) 開会
- (2) 文化資源課挨拶
- (3) 委員就任式
- (4) 協議会委員及び事務局紹介
- (5) 座長指名 井上委員を指名。
- (6) 会議録署名委員指名 井上座長より高久委員、森田委員を指名。
- (7) 議事進行
- (8) 館長挨拶
- (9) 閉会

6 議事の内容と質疑応答

(1) 報告事項

①二子山古墳のき損について

(委 員) 巡回していても難しい。掘ったのは全く興味がない人ではなさそうだが、犯人は見つかっていないのか。防犯カメラは必要だと思う。

(事務局) 現状では犯人はわからない。

(委 員) 警察から動きの連絡はあるのか。

(事務局) その後の動きの報告はない。

(委 員) 報告としてはき損だろうが、盗掘しようとした人がいたということだ。90cmの直径で2mの深さを掘るのはとても大変なこと。すごい技術があると思う。監視カメラを将来的には置いた方がよいと思うが、あってもなくても「監視カメラ作動中」や盗掘者にプレッシャーを与えるような看板を置く、あるいは、「き損事件があったため見かけた人がいればお知らせください」といった張り紙を書いておくなどの注意書きを近くに置いておくだけでも全然違うと思う。何かしら対策をしてほしい。

(委 員) き損の事実が生じた日が3月4日から7月12日までの間となっているが、もし自分がこれをやるとしたら、草が繁茂している時に草をカモフラージュにして掘る。そして後から草をかぶせる。パトロールする人が古墳から踏みつけられて入った形跡があるのならば、あそこだけ草が枯れているとか不思議に思いながらパトロールをすればいくらかやっている最中に見つかるかもしれない。多分これは一晩では無理。中に入って一人しか掘れない。1人で2mも厳しいので、バケツなどを使って一人以上で行っているだろう。そうなるとやはり草が繁茂している時に掘られて、草刈りしたときに見つかったか。

(事務局) 草刈りが入ったので見つかった。

(委 員) やはりそうか。草が生い茂っていたのでその事実が隠れていたということからすると、パトロールする人も何かしらおかしいという疑問をもちながらパトロールすればもう少し見つかるのが早かったのではないかと思う。

(委 員) 真上からドローンのようなもので毎月写真を撮れば気づくことがあるかもしれない。

(委 員) 監視カメラやドローンなど手立てはある。警察と連携をとってほしい。特別史跡を掘るのは意図的・計画的に掘っている。

(委 員) 盗掘は犯罪であることを示しておくだけでも違う。

②二子山古墳発掘報告書の刊行について

質疑なし。

③案内・解説板の整備について

質疑なし。

④にぎわい広場の解説について及び⑤さきたま公園拡張区について

(委 員) にぎわい広場にミニチュアを置くという話はどうなったのか。

(事務局) 管理の面で造らないということで進めている。

(委員) 子どもの遊び場はできると良い。遊具はないのか。

(事務局) 遊具も考えていない。

(委員) 遊具は昔から議論されている。古墳公園の中に遊具を作るというのは、古墳公園としてのコンセプトからずれてしまう。これは平成の初年度くらいから言われている。本来であれば子育て世代や、レストハウスができたのならば飲み物や冷たいものを食べながら近くに遊具があるというのが人を呼ぶためには非常に効果的で集客力も高まると思うが、これからも遊具というものは作らない、という考えか。

(事務局) そうだ。管理の面を考えるとハードルが高く、今のところ遊具を作る考えはない。

(委員) 遊具にかわる何か楽しめるものがあるとよいと思う。

(委員) 体験学習ゾーンには、埼玉古墳群の古墳の10分の1の模型などのセットを作ってほしい。子供たちがそれに登ることができるような形で、実際に登れない古墳もあるので、そこで埼玉古墳群の大きさや一人の首長のために作ったということを理解してもらえるものにしたい。10分の1が一番良いと思うが、120mの10分の1は12mで相当立派なものになる。10分の1は難しいから20分の1にしてほしいと言われたこともあるが、レストハウスの話が出ているということはこの話はなくなるのか気になる。ぜひ、子どもたちが古墳に登ったり滑ったりして遊べるものがあると良いと思う。体験学習にはそれが一番良いのではないか。

(事務局) 古墳を理解してもらえるような何らかの仕組みはつくりたい。学習支援担当には教員席の職員もいるので、相談しながら考えたい。

(委員) 体験学習の場として使えるように、埴輪をつくって焼いてみたり、雨の日に来た時に何らかの体験ができるようなものがあればよい。今も館内で勾玉づくりをやっていると思うが、もう少し広い視点で考えてほしい。高崎の古墳群では、市民や子どもたちが埴輪をつくってそれを実際の墳丘に並べている。このようなことをすれば、地元の人や子供たちが古墳に親しみをもってくれるのではないか。体験学習を始動させるためには、博物館のノウハウがないといけないので、協力して活用法とセットで考えてほしい。

(委員) 館内部だけでなく、他の事例を色々とさがしてほしい。

⑥令和5年度事業計画について

質疑なし。

以上